武德成業

二十二

内閣文庫
番號 和 15251
冊數 63 (22)
函號 150 12

内閣文庫
和書
類 五二五一
號 六三
冊
函 五〇
架 四

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

武徳成業巻之二十二

柏崎物語

天正十二九月十七日

浅草文庫

伯耆守加藤正脩編

神君小牧辺に巡見秀吉羽黒辺に御歩居

大久保治右衛門物見よりある上方ども物見出て永合上方の首とる

神君八幡に人数大物見に巡見金の扇に出羽と見て上方勢淀く

秀吉静地を今取数十丁知山の方へ引手を出れをきりら数

信雄伊勢に秀吉宮を取こ有り兵士拾こらく人数を多く

拾居〳〵友皆見分よなしきに居る地

九月廿七日秀吉美濃路へ入る

神君清洲へ出張也

信濃木曽ニ附テ秀吉へ従て馬廻近習と抜山村義廣ヨシカツ
木曽をふさく俵く信州伊奈の路ニ在る菅沼小大膳を大将ニ
して大名兵好るせめそこなつて保科越前ヲ敗して引る
十月六日小牧山陣屋ニ在備付敵兄を大坂ニ在備付向ニハ上方
勢対陣して居る秀吉ハ伊勢の桑名郡クワへニ出居城濱
崎蔵人を攻ける
又織田中書ハ毛利と秀吉ニ随居故秀吉ハ濱田へ行瀧川三郎義廣
三宅新左衛門ハ船を用意して居る秀吉ハ又兵法師へ出る十月
十四日頃の事也

信雄ハ伊勢ニ在居十六日　神君ハ清洲ゟ小牧へ本多左衛門尉ニ
清洲をまもらしめ信雄ハ小牧をハ小平太まもり玉ふ在所也其方人
数少く迷惑なりとの事付るも無益之事上向ハ数万の大軍之事方一存
斗ニて士事と存候ても皆大儀ニ存候てハ如何之其の方家来とも
古請仕候ハ上意ニ付扁人数ノ家来を寄被小牧をまもり候事方
迷惑と存候てハ不承知と申詞不残同兄ハ如何の事ニ候
いつれとも御請の事なりと小牧ハ尾州の中在所之事なれとまつりとも
秀吉数万の人数ニて攻候ハヽ小牧ニて討死仕候と
何も申ニ付康政悦申し能御請申上とて本多

伝敏　　神君長坂の合戦の勇士を賞し給ひて

ものの花と仕と上意ありて見小牧長坂伝説後伝説の外松平左衛尉清宗

と仰せられ同十七日長篠へ出馬と仰入れらるる筒井順慶も十月十七日

長篠へ出るると仰入れらるる也　同小平太は小牧長坂の橋を守り

長篠の合戦に白坂と云ふ所に上方勢に対し

忘れ申候　成田秀吉伊勢物語の事　柳原

の合戦馬と云ふ事なるべし　秀吉の事　小牧長坂の橋を守り天下の勇士と云ふ

小牧長坂の合戦は天下の勇士と云ふ　徳川家の

勇士なりとの御感　秀吉きりよの御賞

秀吉方服部春国長浜付近に大和の笠置城を伊賀へ入国と

伝へ　織田信長　伊賀攻　秀吉

先手を勤めの上野の城と云ふ　一国の城にて仕置秀吉

攻　伊賀　大和の筒井順慶定次　長篠の九百の名を以上

山城の国二百石大和の国に三百石　伊賀攻　秀吉

伊賀攻　筒井伊賀守定次　名字松倉右近　秀吉

筒井の二郎左衛門　大和小一郎秀長　筒井

秀長　九鬼右馬亮の子生駒雅楽助　後伝

九鬼右馬亮の子　初長浜城　伝長の事

正後　伝長の事

御ゝ所領と見へ時分秀吉川達事行不八百騎の人数く
秀吉毛国ゝ上方堺の事と云家様ゝ古ゝ色ゝ数ゝ相伴
日永山ゝ屯して業為ゝ有る先ハ石川日向加賀に来り居信雄
長伴るゝキカリの聚ひとなりて出居日ゝ会者ゝ出来
方来ゝ結義角倍
信濃守の方と出事ゝ出発ゝ甲斐の百方多色
セウレモトスの弓弱紀ゝすの地生海辺ヒトヤゝ信身
桑井の松平与一郎方政与江郎方吉兄の弟と結兄の子と表
るにて先姫と書みて行と信身今の松平を号書
与江郎死去後保科ゝ氏ハ男如る市生計男に母親新介氏ゝ娘
の方切信雄ゝ出候碓方者と仕ゝ信長信長勢列の四七名
加恵行ゝ皆別山猫の人来飛竜出後ニイノミ男と為ゝ地る
前生成ゝと先ゝ攻る　神君ハ清洲ゝ出人秀吉ハ
方頃ゝ居て有るゝ者ハ計上有て行ゝ出居ぬ事をこゝく
和睦生ゝと言ゝて居ゝ有る
同十月廿日秀吉長田平兵衛初信濃田年人名字不知計男人と呼て
我方成信長の恩と家る如皆の初色ゝ信ゝ明智と結て
先君の為ゝ安ゝ中ゝ元方ゝ御ゝ信孝信雄濃ゝと信

我出とう報と首行方出越く安を非平戈と為く人屋逆係の
今日は天下を行ずる所経信雄公の軍門に降参して信雄公と
天下の武将と作へし諸と称し信雄公に中国と中毎人
恐て古来の恵を忘れ中首は天下恭平と成へ別信雄公参
古方動揺是を立作為へ古く逆と中入信雄に対し公参うう
作兵処へ古く逆中武威を恢て多逆を手人屋も示動毎今
全の西氏所なるへ八月日を含盟として逆事成信に多く
神器へ中上内侍てするに平和を逆事と成秀吉の
信を敬まてるへ相付後清洲を五奉射も和和

神器清洲へ古く逆と河井雪和へ中上る如へ信雄公
も中来上奏を夫八重を重のり天下信氏の恢へと作られ
相先西川の河東二千二川の河東と云方より山河東まて川
と隔対面有秀吉公の上を平伏して今日天の助けを以て
再び器と作へ中上て刀を鞘を立洲に留田平奉清田
集へ信雄に遠分敬れに信雄に中ら人数と二川掛
与又我不所他と号へ逆て中秀吉最入と必言中
神器に清洲まて古の恢を中平を時を以西の長曾我部
古作る元親古を逆親出来紀州と中会海辺和泉河内古奉

[illegible]人間毎年上る手紙に紀州の畠山中会根来も中を清水
の法師中会大坂へ攻入仕合仕ると中上る事に今かしこまれい
と今に信雅和睦より此度事あらたてまつりみ付に秀吉と
攻手へ来る我手も為に和睦する御会と上意もて元来
[illegible]書てとて下毎人毎に毎日紀州の畠山も御会より毎度
十二月毎度毎に秀吉に大坂へ出る　神君御年四十三

秀吉年九歳也

老人雑話

大閤の御子に高田久八と云て家宮内一の人有成付大閤我子に
[illegible]と言と云に今と言に小名と云て信長に信と

大閤聞て曰十信なと物作中一中蔵曰弓矢者ふかとれと
大閤為に成て行とて如くいと宮ふ言て曰高田茂八郎て
[illegible]大閤郡て城に御中毎りと言ふ

武徳大成

凡長久手小牧ノ役松平内膳正家廣松平勘四郎信一松平加
賀右衛門康次菅沼新八郎定盈同越後守定吉同山城守定政
同次郎右衛門尉多田三八郎昌綱小沢瀬兵衛忠重山本新左
衛門重成河窪新十郎信俊駒井次郎右衛門昌長山高宮内信
直柳沢源四郎信俊津金又十郎久次新見七郎右衛門義清同
彦右衛門正勝高林与五右衛門昌重日向半兵衛政成山中主

水正介行折井市左衛門次昌山田十太夫重利山田志賀左衛
門正勝山田金六郎正直山田平十郎正勝小笠原十郎三郎信
嶺同喜三郎安勝植村家次飯嶋丈藏正勝高木主水清秀同志
摩守一吉水野和泉守忠重高木九助同勘左衛門安藤金助家
次安藤重倍河野庄左衛門盛政水野六左衛門勝成阿部弥市
郎信勝永井善左衛門安盛朝比奈弥太郎泰勝其子權右衛門
泰成高力与次郎正長三宅弥次兵衛小幡又兵衛昌忠三井十
右衛門同孫助坂部又十郎正定坂部三十郎廣勝土屋三郎右
衛門昌吉鳥居左京亮忠政加々爪隼人正政尚朝比奈左近宗

利同彦右衛門真直同新九郎昌親同源右衛門泰勝中山茂左
衛門忠光渥美源五郎勝吉五味主殿助政義今村彦兵衛重長
同九郎兵衛吉正近藤登之助同小十郎内藤左馬助政長内藤
金左衛門忠清青山善左衛門正長同又六郎重次内藤与左衛
門重政伊藤金五郎其弟喜左衛門春景加藤源四郎正勝同喜
左衛門正次同茂左衛門正茂同傳兵衛正信同勘右衛門正次
都築弥十郎正秋同六郎右衛門勝時西山源七郎昌寛大久保
新七郎同新八郎天野三郎兵衛康景蜂屋半之丞戸田孫六郎
康長大久保与市郎忠益水野太郎作小林又六安藤對馬守大

久保荒之助忠直成瀬吉助重宗秋元甚兵衛吉久渥美久兵衛
友重椿井三河守政定江原玄蕃金全竹内五左衛門信次武藏
孫之亟渡辺忠右衛門内田新六郎正次小林十太夫正吉同平
右衛門正次神谷与次右衛門清次同左馬助三正大岡七右衛
門義勝大草深右衛門忠成宮重傳六信房榊原喜平次正成同
隼之助忠政犬塚平右衛門忠次落合左平次道久曼目長右衛
門信次金丸四郎兵衛久次筧勘右衛門元成其弟助兵衛為春
深津弥右衛門正吉美濃部鹿子之助茂廣設樂兵庫頭貞清久
松彦左衛門忠次永井與次郎吉次松平萬五郎勝綱同次郎左

衛門長綱同半六久世三四郎廣信多門平七郎重正同平藏信
清朝倉六兵衛在重望月与太郎服部仲保正石野三左衛門廣
長青山虎之助久永源兵衛重勝永見新三郎晴定松平五郎右
衛門伴若狹守兼盛藤田助藏小笠原傳三郎宇禮御右衛門三
枝八郎左衛門向井將監太田久太夫及ヒ榊原康政カ家士原
田權左衛門村上弥右衛門冨田三左衛門毋羽四郎左衛門都
築五左衛門等或ハ討死或ハ首級ヲ得テ各軍忠ヲ勵ス
神君是ヲ感シテ或ハ御書ヲ賜ヒ或ハ領地ヲ授テ褒美シ給
フ畠山左衛門佐貞政モ
神君ノ御内意ヲ請テ根來雜

賀ノ兵ヲ催サシテ信雄ノ告ヲ待テ樂田ノ後巻ヲセントス
長曾我部元親モ貞政ト合心シ大坂ヲ犯シ攻ントス然トモ
和睦ノ支ナルニヨリテ其兵離散ス

家忠日記
廿二日 羽柴秀吉権大納言ニ任シ従三位ニ叙ス

柏崎物語
秀吉大坂ヘ帰リテ後留守田沙田ヲ　神君ヘ使ヲ以テ信雄公
も滝川三郎左衛門ヲ使ヒ地ロヲ以テ逐ハ信長ノ中好ヲ思ヒ信雄
公ヲ出敗ノ後滝川ヲ以テ信雄公ヲ手ノ武将
と可仰ノ由ヲ秀吉ヘ出和睦ヲ以テ信雄公も中絶
ヲ以テ右ノ仕合ヲ以和睦ヲ仕ル旨秀吉ヘ出地

依ル　神君御一門ヲ出家ヲ流ル出ル家ヲ
カタリ御ヲ何ヲ申上ル如石川伯耆守ヲ中上ル秀吉ハ平氏信侯先
ヲ以大軍ノ際ノ上移ル陣ヲ彼ヲ出和睦ヲ先ヲ幸ノ事ヲ
出和睦ヲ以テ秀吉ヲ出敵対ヲ御ノ
出陣ヲ中ル　神君ノ外出立ヲ以テ秀吉ヲ
大軍ヲ以テ皆ヲ信ハ世氏ハ中ノ中ヲ一向ノ事ハ
カタヒヲ上ヲ以テ何ヲ申ル信ヲ侯ル秀吉ハ所ノ外
ヲ以テ信ヲ思事ヲ出信雄ヲ行ル　神君ヲ
出ル和中ヲ出信ノ夜幸ヲ以石川ハ出ヲ

如斯八代の間に家臣二人の信雄方にて前田又兵衛と云人信雄に
長時と

神器の伝授してとなえ河内の事と云なる名を信雄と
業すること世日の間なれハ内々にて平左衛門の母より信雄
へ伝ふ之ハ大切なる名を以て人の心動揺
すること信雄ハ大切なる名を以て人の心動揺
大切なる名を以ハ業すること中度神中の
和山の城と雲月十六日に到て丸まる義者百人を連て雲の中と
行十月の雲雄て雲月廿三日ときいめて是ハ二月を雲毎る源氏
も山もかうつて一面の源雲の間と信雄ハ動る信雄奇とよむ
かくさうれかりなきてゝる世の中とをゝてや雲氏白く源らん

の幸百若して信雄の信雄ハ如ち源氏ハ信雄ハ中上洛馬幸定を
乃ち亡て是上方ハ十二月四日源氏ハ大久保七郎左衛門尉忠世
する四日宮城にて成敗中上るハ先長信長の如くと思ハ信雄と
出ハ源氏ハ不義て家康ハ織田一統の天下を治ハ
家康と中上

神器上京を信雄て業る家康と云
新宮ハ信雄ハ新宮ハ自分の家と志れ如く名を初家に成
是今又破ハ家ハ家康方若ハ業ハ如ハ家と云
ハ作新宮ハ家

御家と織田ハ此ハ自分ハ神中と
特度源信ハ此ハ雲ハ中上中服ハ下尾信ハ三家信雄ハ和

戦乱後の事実を来書ハ
徳川殿と共に攻撃して和平
申し政登京に進めらるるも信雄承知なし秀吉春氏事と西海の
高力与左衛門と石川伯耆ハ英雄之ケ様の事を知人ハ実に恐怖
事高力の伝死を聞くしかり
酒井雅楽頭ハ信長の恩を感ずる
なり〳〵自分を強信よりたるを不命を聞かるとなる
内安倍と申上る上意より彼ハ事生き曽我より仕せ正ても有
まハ信長を殺すとしと申伝ひしも
信長の大名　神君の御内を感し者忠秀吉さ〳〵方を通
聞りの事と知て生命を先分信長名跡と求め信長と共に跡とつる
く中ふも中原部の士共人余速判して以来此跡を中上る事紀伊
志て豊臣乃家と申上る
十二月四日信雄滝川一益に秀吉ハ京師の出れ申上秀吉ハ主君と
為信雄滝川新和と申一明之十四日池先生信雄時より後も秀吉
と申今年よりて及中と万民安信ふ仕ハ相秀吉ハ形一信長
の図と中信長と新の為天下ハ為るより生ても信雄
神君天下の為と所迄ハ人信ハ幸甲者ハ為一生ても松平隠岐守殿
の出事人信雄為信長を秀吉申迄秀吉為信雄

とも候の外は此地も成所ニ而て尊精ニて被成候と上意ニ而て吉良ニ候雄
三百進留まで甚悦候御家来も雖為ありかたし
三郎殿郎定勝と申ハ二には召出ニ候所　傳通院様御供ニ被成
御家郎ハ人質ニ被成度旨ニ被思召候し今定勝斗の樂く之出申候
とも御座候　神君も御意ニ而義丸様は浪人ニ而て御入候
其こと申さるに松ろ当年十二才にて御成石川伯耆守は送り御留
伴御代かけ多分御座候子供代丸御家来六十余人大六人ニ而相勤
之後大坂御附人之者ニ上方へ御着秀吉公ニ所悦而て河内守ニ
而て出御候其方へは上羽柴三河守秀康公と奉称御名乗候

送り帰る

續開談

権現様御家人大身成ル人質と秀吉へ被為遣候ニ付御家人大身成ル
中ハ我等も人質ニと申上候所以来何事有之候共母や女房抔ニ被為
右思召ニ而て申上候と申上候

明良洪範

秀康卿結城ノ家ヘ御越名跡相續ノ時ニ　神君秀康卿
ヘ被仰含品々有其一ツ結城ハ代々ノ古家也家法定式モ可
多カル始終不立新法守古法政法旧臣ト能談和シ万ツ諫メ
ヲ容我意ヲ立ル事ナク諸事旧臣ト打砕君ハ臣ヲ不疑臣ハ
忠義ヲ不忘様ニ礼正ク大臣ニ對ル時ハ吾禮式ヲ守リ仁第

一ニ士民ヲ惠ミ古法ヲ守リ旧臣ニ政務ヲ任ル時ハ威勢日
々ニ盛ニ下トメ不可成犯事大將ハ以礼人ノ服スル取有下
又上ノ礼ニ習テ作法能キ者也其身不正時ハ雖令ト不行ト
云ヘハ自ラ守ル取政道ノ第一ト可被思奢ハ付安キモノナ
レハ吾申付ル取ノ目付ハ家中ノ目付トノミ思ヒ給フナ眼
ヲ付所ハ自分ノ目付善悪ノ諫官并士民ノ目付也朔望ノ勤
家康ニ對ル如ク心ヲ實ニメ毎月怠ル事不可有是ハ吾家代
々ノ掟也三タヒ吾身ヲ顧リミルノ聖語此中ニ有ソ家臣目
代ノ用事ハ近臣ヲ拂テ對話スル法ナルニ人先其レヲ知ル

類武道不案内ノ家ニ有事ハモル、ヲ以テ破レ密ヲ以テ成
ルト云然ルニ佞奸ノ臣ハ愚君幼主ヲタブラカシ家臣眼代
ノ詞ヲ引出シ推メ波汰ニ及類多シ近臣等眼代家臣ノ密言
ヲ探ル輩ハ不忠佞奸ノ臣ト思ヘシ密事ノモレ安キハ近士
悪情ノ者アリト知リ玉フヘシ愚君幼主ノ不行跡ノ非或ハ
衆事ヲ語リ玉フナトハ近士諫メテ是ヲ止メ常ニ行否ヲ諫
ルハ忠臣也常々心ニ應スル如ク事ヲナシ君ノ心ニ叶ハン
事ヲ思フ輩ハ不忠ノ臣ト思ヒ玉フヘシ總シテ主ニハ物ハ
難云モノ成ルニ好所ヲ押ル等ハ器量無ハ不成加様ノ處ニ

君臣心ヲ付テ人ノ善悪ヲ知リ召連ル近臣結城代々ノ近臣
無隠召仕罷臣トテ人ヲ隔ル事ナカレ士民ハ皆同胞ナレハ
分ル人ハナク以仁道賞罰ヲ明カニスルハ其ワサ士民ヲヒ
キユル大綱也仁道ヲ悪ク心得レハ武門ノ矢正道仁道コソ
武ノ本躰ナレ其業賞罰也賞ハ有功ヲ譽罰ハ有罪ヲコラス
是仁ノ本躰ト悟リ玉フヘシ有功ニ品々有忠勤ヲ功藝才ノ
功軍功人ニ無之ハ希也其功ヲ能知ル事ハ眼代ノ正キヨリ
知之其功ヲ無大小不空處賞ノ信也親族罷臣無貴賤其罪ヲ
不許處罰ノ信也古人ノ物語ニ両葉不去斧鉞ヲ用ヒシトス

トアレハ能々心得正賞罰ヲ可執行ハル政務ニ怠リ仁道ノ
實ヲ忘レ佛意ノ誤慈悲斧鉞ヲ用ルカ如キ大害生ル事多シ
故ハ賞罰ハ國家ヲ治ル釘クサヒ也世話ニ言處ノ家ハ末代
主ハ一代ト云ハ代々ノ忠信ノ思フ所也旧臣ノ諫メヲ容レ
捨我意家門長久成ルト押返シ被仰聞又秀康卿ノ神佐近士
ヘ今被仰聞趣ハ君臣共ニ能ク可心得也近士ハ爲第一ニ無
表裏旧臣ニ和シ勤功忠意ノ人ヲ見立面々ノ勤家中ノ鏡ニ
成ルカ如ク心掛ヨト秀康卿御同席ニテ被仰聞シト也
右秀康卿ヘノ御詞書留三刈大給ノ百姓所持江府ニテ元

禄年中大火ニ焼失ル也

柏崎物語

伊賀の先祖の子孫小留友迫秀吉ハ伊賀の西内ニて
アリシ村名なり小留今武蔵の国ニ有り

宮人多し

武徳大成

天正十三年乙酉　皇朝ハ正親町院　武家ハ豊臣秀吉　春正月　大神君濱松城ニ
居給去年北條氏直カ兵下野國佐野城ヲ攻メテ佐野修理亮
宗綱ヲ殺シ其首ヲ濱松ヘ献シ軍ニ勝タルヨシヲ告ケシム
十六日　神君岡崎ヘ出サセ玉ヒ二月濱松ニカヘリ給
フ参列ノ諸將ニ命セラレ一國ノ人夫ヲ以テ吉良ノ城ヲ築
カセラル

柏崎物語

二月十日秀吉正二位内大臣ニ成る

落穂集

是ヨリハ自分ノ平の秀吉と名乗給ふ　内府ヨリ任官後
苗字の姓なる事なし

柏崎物語

二月十日信雄尾州ニ納言ニ成

秀吉乃醫師

天豚と何ふ施薬院なりてハ成事也

神君と出川殿ト中ラ仲ラ成ルなり
秀吉ハ内ニ入ル

浄土宗ハ家の祖と成秀信雄と進め信雄ハ濱川殿ハ信雄ハ古方勤書

を右源氏の時の出征後第上に於義光極と秀吉武勇人世
中に称せし和義の孫なり市上法名なれども
なる名は天下万年何年大年の為と有る故武勇
彼上洛の孫なりと有ハ秀吉の人法遠と法大名同志なり上洛の後拝す秀吉に
一藤拝す上洛と成り山後帝綸旨成必中公用と仕候出家と称伝雖
帝送秀吉西海道江なる伝と絶別雑賀を攻き後又当家に降参
秀吉根来山伝法院 濱沢 田中 畑 粉河寺 雑賀 根来
六ヶ所寺と有雑賀の為と行ふ是ハ是利の為地主に為
是銀吉堂の積、吉寺吉の為立城なり東西七十八間 二重城

西の方九千三百 二重城西の方七千間南の方百廿間北の方百三十間
外曲輪九千四百余城和泉出来右京山田元千場根来大膳
三位場吉吏場長橋の小手場本院の方高野山院西の方
西蓮院西伝院千力本坊法第院宗宗教院 合総合能士三百六拾人数
九千四百五百沢村の方も有之等防御なり秀吉三月廿一日
紀州へ出立数万の大軍也
平押に乱入する紀ヶ根来を攻伝と云法華ハ弱
きと世上に言紀国に言紀一法滅と教言時も一味せり
法ハ弱根来ハ強大なり 紀ヶ伝出山ハ

不居山門用山先ハ法僧之是ニ御り居る
秀吉の細川左京亮三好孫七稲葉彦六箇井吹雪伊賀守大谷
形部信濃守伊達治部少輔等と攻る蒲生忠郎中川瀬兵衛
右之後の城主長谷川藤五郎一万石ヲ根来山ハ法
御ゐに光源院福長院院下の根来ハ法僧牛兵
小関根来僧の根ヲ立て是ハ西ハ雑賀の附城ヲ居和山ハ法僧牛兵
三好秀次ハ石城ヲ攻る長谷川宗仁是ハ長浜城迄き
ひしく攻る城中ハ堅ク防ク和泉ハ三好秀次ヲ攻事ハ家ヲ附細川大膳
なと多石城ヲ攻る粉山の根ハ箇井吹雪ヲ家来蜂屋ヲ
火ヲ射懸ル如ク蒲生ヲ焼付ル都ヲ迯ル迯ル焼死の先
多ク百余ヲ付先粉ヲ多焼ヲ寺ハ毎ヲ夜出先の者ハ切ル不なく
用山なと御退ク法の焼の中ハ御御ハ是ヲ打退ク迯ル者
伊賀ハ方ハ家信ヲ方ハ退き先ハ是ヲ長る秀吉ハ多ク出付
彼付ハ紀列士白樫ヲ〈感御と仕共
根来ハ多焼大伽法院一宇ハ焼ル秀吉能ハ信
之ヲ家ハ川南禅寺と仕之今の伽法院八年後　御前象
今小建仕
秀吉ヲ新賀ハ仕ル如　新賀ハ法市松田源兵衛ヲ家ハ

支那若干の商人等、弟林近郎等、品海三郎等、古橋平兵衛
等、宋商人と浦市中会所迎隆寺する秀吉能こて隆寺後に
とて古橋宅を旅宿とし居りし、後に隆寺の出
和尚安情と同世四日白樫分酒を呑ひ小雀賀、古田と云ふ地有
宋商会所西人間義すると中、秀吉今てあれて居りる
共傷所々人殺者、鄭一純の門を一分ると出て十里四方
求行ちはるさんと昭十八日迄て居る毎日巡見後
出発明石与四郎一百石の加増有、解る者迎る流罪と押迎
甲賀の者共押迎の中、為之後毎日第百俵ト行て後と共舶
右の古は商人の時分大風ありて百年目中押切完の後
根なしと云時より秀吉共所前と毎日て後て津浦分明俵
と七千万斗ありて古俵より指く右の切れ指迎市の分く第三年分
出攻の城中の共四の長日秀吉沖縄の海賊間一て会と
思ふ不在毎度行よりて指揮の者と初て張年分
商合勢毎指揮年人初て古田の分て陣より城
九鬼右馬之允他名熊野新宮浦、色市文新文助知三山地
四年中一の長陽と有ウンカ侵の年て日年中一長陽不
加く有より一いさるきいさるの尊と参るより二百俵の神領

熊野の十津川へ今までも沙汰ある鉄砲まて送る猪猟多く所々
雑賀衆なとの者共秀吉へ敵対せ大軍より雑賀衆地の
峠嶮を拵へて我侭する人々あり大軍まて下向と成りかけ
を掛合へて大軍押掛山を焼度湯の川迄焼ぬ
焼残る者数々よせてあるを切る程の者切殺る紀州
国内平内ハ紀州和泉と中の秀長より出る大和和泉紀伊
三国の大名より紀州の岩山と若山と限り出る成兵城より出
和泉の社人ハ ハウホウ院なと礼を言る先ハ湯川へ荷駄せぬ
出ず熊野の山中所々宮所々向後安堵と仕上

有川の松名木古来ナンリウ院様の時枯る沙汰の毒と思ひ
住古から所の諸人の松あり古代より枯るハ寒の毒と多く出伝有之
所より枯る所所所の札を立何歩ても松の生ける療治
所所ハ寄りて恵せとも内一人の賀医者て療治仕る
夫ハ松の枯るを出来せ所ハ右の賀医者て療治仕る
前思時より食を仕と松の枯所所へもくさを多く入食する
生ける元のとく
秀吉松奇瑞へ有て歌てよう有る
所有て西ハ海より添むとハみとり立そよ布川の松 千陽

天正十三年三月濱松の御城にて　家康公の御背に根を
の根成御腫物御出来仕候て作兼左千郎（イ作）　岩倉長十郎（イ同）　河野善兵衛
中三人の医師仕候て根を押出せと仰付候へ共何も活く押
事と仕候て兎や角と騒申候内に男子の根出来仕候
と御尤に蛤貝の口あてたきみて引ぬけと仰付候る義き
面々何の考もなく仰の通よまり申せ共そこく騒申せ白き芋の
根のごとく成物の一二寸斗根部に御用に掛申せ共そこ能と
仰付候に右根より御腫物俄に大に上り御痛強く成御腫痛
さへ堪れ難く成御苦悩中御に入御腫物お治

に汗を掛り申医師所も根を療治と申上るといへども
御腫物の根子無数なる成せられ後くみに体腫物の色り人の
悩く陸りも無きと御意なる御腫物と仕り候
家康公御心も御腫物被遊れ申と思召るや家臣中と
なよせて御迷云被遊る程の義なれ共なほて院の御
他界と御治仕こと不可有と申多能薬御薬く所を尽て
腫物療治仕に脇差長宗の業と御腫物と申上るといへ共
一命を用心被遊れすてこそ御薬の後を立申
殿いもさとたる療治と存て御死と成さる事偏に

事とハ中なゝらを沢情き御命令ニ成ハ宮ハ十ニ九ハ御
本後有名家と醫師先も中ひ御ハ百も八中ニ成ハ仕ハ先
〳〵年ニ〳〵ひ多家ハまて御仕〳〵ハ御ハ百家ハ百ニ成ハ
御先〳〵年ニ〳〵ニ中ハ今生の御脈ハ共今中上ハと立て御と
流〳〵御薬と成ニと

家康公御使ハ御ハ御

あまと留ハと作〳〵ハ御〳〵ハ貴ハ年ニ遠ハ成ハ我ハ病氣ニ成
とて年ニ年ハ世ハ紙ハ年ハ成ハ御の事ハて御ハ成ハ
事ハ御ハ成ハ御ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ
御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ

事や方〳〵きと御使なるハ手ハ御使ハ中ハいやくまと
殿の御ハ事ハて成ハ人ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ
なとも今ハの世も世ハ若ハ

殿の御ハ成ハ別なる人乃

御使ハて入ぬのハて方ハ成ハ高ハ中ハ成ハ若ハ御ハ
御の御ハ御使ハ御ハ仕ハ用ハ御ハ御ハ御ハ御ハ御ハ
ちんと成ハ人ハ世の人の片情と云ハ情ハ成ハ人ハて加ハ
尋常人前の如事ハて成ハ人ハ成ハ今日と

殿の御ハ

斗ハて御ハ中ハて人ハ毎ハ成ハ成ハ唯今ハ

殿の御ハ

ハ程ハよおハて御ハ他人ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ御ハ成ハ

内閣文庫

国を駆ひ中さるくい必定こ浦家中の侍人も多聖の
敵よ後まて力の為こるはけくてにさるく安全我ハ拾仕号奉ん
家康こ浦ハつ中より外なくひ手付よ我ハ存命ハ中ハ
命を惜く奉命ハ中と人よ後指とさまてハ迎も生る甲斐
ハなくひ旨を武田後家中ハて耳利度とて侍人の当家よ逢る
仕も立人の運傾けハ今程
御當家（第〜と）中多年人命
組下よ松下一堂向後一堂の者ハ名を稲ひ長〜まと
常〜只今事も仕まてまてひ先人の上ハ奉中さ仕と所〜道理と

見苦ハて涙と流ひ芸附

家康公ハ仕ひ名ハ千言中和
名浦ハ第と身第〜世浦家と八政方の間の大サまて他国自身
まへてを上仕ひ先国第とも立てる如よ迎浦療治ひ
千取出ハよ浦種取吸切と戦安浦腹血流と為る他国
ハ声を上て時一法よ浮く浦時他ハて浦平倉と

柏崎物語

秀吉言葉〜使と参一前〜分家ハ傾新ハ千分千俗切ハ不
後ひ分ハ浦長分ハ中の想俗出家の身持ハ〜人根来寺山の
根本者ハ年頃ハて法と言葉も初ハ根来と合俗後上天法を

不揃叡命堂に於て前後陸続され如此に下部に至て住寺毎
寺領に五拾寺所一万八千石の上に三千石加増有之其外参詣
続閑談
高野山は太閤秀吉の世より別日の下き恩威を加へられて
進ずるとも所望山の安堵の外寺領を云ものなく此節に
物に奥山聖人として本願の宗信者は人参石あさやかなる
軍法に如何なる仕合仕る事に山員尾好て立直りに拾
し大海山寺の外新寺して別山中に奥山寺といふを立
彼聖人と号奥之元来奥山も宗信の方にして行法と表
寺を聖人寺事の人は悪行人方とおのつから天下に出笑よき事
行人方は日に盛昌し宗信の方は月に衰て年歳と共に衰り終に
数十の法論に成り元禄年中に紀伊国の末寺塔頭等
十五寺に成て沙汰裁判ありて沙汰に及ばざる行人方六百七十余人
を捕へ遠流に成り山及鞍馬寺は初信長公の時に
味方仕り秀吉の時高野山は敵に成り攻て元来中
立の義友元と一列世人事と思り敵対仕長久の時に
東照宮の沙汰に会して家列畠和田と侵し攻る度に大因
思りて終に攻亡され半ぬ此時聖源院と和根本の宗徒勢
別に去り後巻吉文に乗て寺列法相に成り

權現様へ仕へ奉る事疑ひなし元和元年秀頼へ属し際
亡失ぬ

老人雜話

大関弓雄山へ参詣の時別粥とすゝめよと宮へ申渡て料理
人呼て参らせ大なる椀にて云云弓雄山よりは白なきを以て我別粥
と食へ事と知て持来る料理人は文禄の頃と云実は持来る人
御よりも多き人数なれ迚相の上ふてきさんて別粥となせり
後よりの序よりられい大なる椀にて云なくいなくと云て常の
粥と出さんよりは何の為にか我力より一粒宛けつりて食も
人の作なれば其の奇りを事にせぬものと思ふまゝとて

柏崎物語

有又人数と却て出成り攻申秀長嫡子と共一巴川の政
当時より攻破る

先年古作より西土有手付の関白一揆原へ出達の内と申伝れ
り和と出伝は出羽守と達と共戦去綱云出羽
也手子又弟紀ノ上り一番と徳手弟西見と徳出代用出羽人まて
長男我紀と迎出大友宗鑑方へ迎行宗鑑の聟友之
信し西司は絶長男我紀勇と振居如今度キワの御出
出攻安信秀吉へ攻落条出羽平明地
秀吉付付不信夫大将軍とあけ度と分出利義昭は安藝乃

廣縁にて行水なんどをつかひ給ふに秀吉自分にて出給ひ
給ひ送義昭給ひハ秀吉ハ信長の第屋敷なれ共所ゆゑと申て
秀吉ニ向ひ第一の右筆にて居給ひ手水に向ひ給ひて
居る菊亭殿給ひハ幸の事也尚分ニて出と給ひ給ふ
所給ひ下遣ひ給ふ

柏崎物語

秀吉関白ニ任ぜ所守様従四位下ニ任ぜ侍従中将ニ成
尚上る秀吉清盛の様子と来
内裏定家の古今集と勅ぜ手後
禁裏ニて御能と仰付られ給ふ

梅田中ハ出来ハ道にて童にて馬上にて給ふ
内裏ニ来り出能見物仕と給ふ

老人雑話

或時大閤馬ゆのりて爲丸乗りと来
内裏ニ付新出家の下女四人あまをとられとりけ為て見物せり大閤
馬上にて曰ふ今
内裏にて吾能と出ぜ給ふ見物よこすと大閤
梅田中ハ能有猿楽ハ物ぶれハ同様ハ為て法師ハ肩にかけて入
ものと申
大閤

禁中まて能とゝ[illegible]付長柄も立今小能とせう是程能とすゝ付小刀
長柄の刀と常〳〵虎の皮代大中臣とさけて猶うち代中程ゟ立する
ら見物て能とてりゝも手代立ゆ〳〵よりう寺夫婦衆の代
なり〳〵猶とうゝあて西てりりゝとて

柏崎物語

時分秀吉殿代武百万の御代て金根影衆御立院拙〳〵小倉
根と稽垂南小右尾の者とするも因幡と皆〳〵つまて伽屋て立今
根とゝ長皆〳〵智恢て中程ゟ今後ゟも金根とゝ[illegible]事有
高田安房守ハ勝利の後童腦〳〵酒又小原〳〵酒ゟ後
信長没後甲信市〳〵ゟ武田ゟ任せ切れ八万石程の身上ゝ八ゝ和

御家〳〵酒

校城沼田市城〳〵是後小幡ゟ市和程ゟ小原ゟ上列一番に成ゟ〳〵
高田沼田と市ゟ右〳〵〳〵方〳〵ゟ成程ゟ右〳〵沼田ゟ
長久ゟ市ゟ会ゟ常安ゟ成ゟ[illegible]ゟ友尚年ゟ遠ゟ村小原ゟ代後中上ゟ村
高田〳〵沼田と後ゟ右ゟ信ゟ高田ゟ為て ゟ家友秀吉〳〵中為秀吉ハ
市和程と市安京腦〳〵加賀後ゟ右中送る扱ゟ高田ハ今迄ゟ市ゟ
なり〳〵和程ゟ[illegible]ゟ能所〳〵能所と市ハ沼田と小原〳〵ゟ
能ゟ[illegible]〳〵ゟ市和程〳〵先小原〳〵ゟ[illegible]ゟ
ゟ[illegible]ゟ中程〳〵ハ[illegible]ゟ新ゟ[illegible]ゟ
尚十九日後ゟ分後度〳〵ゟ入ゟ高田ゟ[illegible]ゟ為〳〵今所ゟ高田ゟ宣者〳〵

甲州七郡余上国へ出張富士の根元と申る浅間ヒトヤ仏初長伝の御書と
外下七月 海老
落穂集
同年八月　　家康公御書馬ハ元亀四年武田軍勢と合戦信州
上田の城を武田安房守昌幸と攻付せ給ひ其軍の様子ハ書付
甲州美濃守義政を初て小屋敷と申封侯御ハ其時御供ハ向後甲
信両国の侍ハ　　當家へ参り武田の四郎西上野と
添上州一国の侍も一番に小屋敷へ参り武田と事終り外小屋
敷へ切入る信州佐久郡と小屋敷より上国
外出陣の如く武田安房守浅間の城と絶壁て小屋敷へ
　　御當家へ

氏直公信濃佐久郡の内武田安房守
内匠頭殿小上州浅間の城ハ行るゝ武田家へ参るとも
其方の指先と云て切入る城地城ハ上田の城と云
所平地の如く出張共の小屋敷へ明渡と云信州
なき事ハと申て中く同心ハ仕其上秀吉公の威勢日々盛んに
如ゝ是と有城と御申て上田ハ　　御當家へ渡入まる所て城て
侍人なとも渡相の事城に居合ハ秀吉へ五人
中の名為ゝ出すに迚一郡に出発ら如ゝ今度為ハ
角き出来の事浅井左馬助を上田と攻付て是と小屋敷に

おなじくしかはの地頭職を大久保七郎左衛門忠世に宛行
元和元年岩七郎親吉跡を相続し長安寺殿御代慶長十九年
浮田四郎兵衛尉信永富田七九郎二枝平左衛門を山初久
左衛門尉川井甲斐守に付て攻落し向て合上田表へ後向して後の
八月二日城を乗取こと攻落る
柏崎物語
富田安房守は市人牧信濃千浦川を御越て来る西と云ける安房
の方に板垣帥理（甲州板垣の一族）云者は宣味方弱く見せて川退に入る
を追て来ると思へ共討て出る大方敵は町と云焼拂を焼の下
より討て掛り下手破と云安房勢は町と見命を惜ぬ振りと頃と
結ひ川の端へ追寄て知る村方と無る所と然れて打掛し
て討て出て来る云者を甲信の歴々安房の云者て敵へのよ
あふ安房は弓矢の名人と板垣帥理は今迄て聞よりも云板市人牧
まつ〳〵軍して富田方迎る味方を崩れと
を乱雑に町屋へ入乗と云大勢迫は中と一中と掛よ焼付よ
せと御富田七九郎右衛門尉と云て大は安用敵の出張る所と云所
して四る一里半四方掛て追掛る富田左衛門尉湯浅と詠て
さ何討て出て討て出る何方と云て来る市人牧庵一人も
く追返る大久保七郎左衛門尉て川酒井与九郎中今日首と

[illegible]
大間の為ニ[illegible]と思ふ赤沢地方掛る力ヲ有元の[illegible]
矢沢[illegible]の人数[illegible]ある七郎蔵例の合の蝶氏大指物今日
[illegible]て居[illegible]と見て[illegible]の平助[illegible]
大指物と見て七郎蔵ハ[illegible]
さて[illegible]七郎蔵ハ武威よ[illegible]掛ハ[illegible]
[illegible]平助見付[illegible]
[illegible]七郎蔵ハ人数と上て平助[illegible]の人数[illegible]
[illegible]七郎蔵ハ矢沢[illegible]の人数[illegible]

知[illegible]と[illegible]の人数も同様[illegible]て川[illegible]
引[illegible]る流[illegible]の[illegible]
城[illegible]矢沢[illegible]
武徳大成
神君大久保七郎右衛門忠世鳥居彦右衛門元忠平岩主計頭
親吉ニ命シ兵ヲ發シテ上田城ヲ攻シム岡部弥次郎長盛柴
田七九郎康忠諏訪小太郎頼忠保科弾正忠正直松平源十郎
下條知久遠山大草三枝平右衛門昌吉矢代左衛門勝永武川
芦田ノ者共等甲斐信濃ノ士ナレハ各兵ヲ発シテ相會シ都
合七千餘騎上田ノ城ヘ押ヨセ苅田ヲシテ是ヲ圍ム城中兵

ヲ出サス参州ノ兵トモ怯ナレト思ヒアナトル閏月二日城
ノ二ノ丸迫攻入ケル火ヲ放タント云ケレハ柴田康忠是ヲ
留メテ曰ク火ヲ放タハ敵急ニ撃チ來ラン然ラハ我カ兵城
中ニ取リコメラレ出カタカラント云ヒケレハ放火ノ事ハ
ヤメヌ真田昌幸城下ノ砥石町口ニ柵ヲカマヘテ第時田出
羽ト高月備中トヲ篭置四百余騎ニテ是ヲ守ル嫡子源三郎
信次（後ニ伊豆守ト称ス）城ノ大手ノ前ニ兵ヲ備フ昌幸八百余騎ヲ帥ヒ
町ノ横小路ニ柵ヲ設ケ路ヲフサク郷民共ヲ集メ紙旌鎗炮
ヲ持タセ谷々ニ分ケ置ケリ参州ノ兵進ミテ町口ノ柵ヲ攻
ケレハ時田高月イツハリテ城中ヘ逃入ケル参州ノ兵敵ノ
敗軍スルト思ヒ備ヲ乱シテ追ヒ行ヲ信次二百余騎ニテ進
ミケルニ参州ノ兵進ミカ子タルヲ見テ昌幸八百余騎ヲ以
テ関ヲ揚テ横小路ヨリ騎出テ急ニカヽリケレハ参州ノ兵
防ケレトモ叶ス引退ク信次及ヒ時田高月等城ヲ出テ追ケ
レハ参州ノ兵横小路ヘ退ケレヒ柵ニテ塞ケレハ叶ハスシ
テ味方多ク討タレヌ敵兵町ノ外ヘ出テ備ヘケルニ味方モ
備ヘヲ立ントシケレヒ引立タル勢ナレハ止メカタシサレ
ヒ大久保忠世平岩親吉フミ留ツテ矢炮ヲ放テ敵ヲ防ク忠

世カ家臣本多主水親吉カ家臣尾崎左門兄弟殿シテ引退ク
昌幸跡ヲシタヒテ進ミケル御民ノ伏兵共モ谷々ヨリ起リ
攻カヽリケレハ参州弓鉄炮ノ足軽共敗軍セント見ヘケル
ヲ本多主水馬ヲ返シテ尾崎左門ニ味方ノ兵敗シト見ヘタ
リ如何カセント云ヒケレハ左門カ曰足軽トモ下知ヲ用ヒ
サル故ニ敗軍スヘシ我等ハ討死ヨリ外ハナシト云テ兄弟
共ニ敵ノ中ニキリ入テ討死スコレニ依テ参州兵死ヲ免レ
テ引退キケリ鳥居元忠平岩親吉藤森ニテ引返シテ人数ヲ
備足軽ヲ前ニ置テシキリニ鉄炮ヲ放ツ昌幸一方ヨリ戦ワ
ハ利アルヽシキト思ヒ信次ニ命シテ横鎗ヲ入シム信次五
百余騎ヲ帥ヒテ脇道ヨリ横ニ攻カヽル昌幸モ進ンテ戦ヒ
ケレハ元忠カ兵士巨海孫七郎小原孫介中野太郎八大澤竹
兵衛同甚九郎鈴木又五郎同新八等討死ス敵ノ方ニハ上杉
景勝カ加勢ノ兵モ後ニ進ミケレハ元忠モ防カタク引退ク
昌幸勝ニ乗テ追ヒケルヲ大久保忠世十四五騎ニテ踏トヽ
マリ家臣乙部藤吉本多主水弓ヲ執リ畔柳孫左衛門鉄炮ヲ
放チテ敵近付ハコレヲ防ヒテ加賀川ヽテ引退ク城下ヨリ
コヽニ到テ参州ノ兵三百余人討レヌ忠世猶留マツテ退カ

ス金ノ蝶ノ指物カヽヤクヲ見テ弟平助忠教反シ合セ忠世
カ旗ヲ川上ニ立ツ敵一騎來リケルヲ忠教鎗ヲ取テ突倒ス
此戰ニ保科正直モ戰ヲ励シ家臣數多討死ス諏訪頼忠先ニ
進ミ真田家士柳沢采女ヲ討トリ家臣多ク討死ス三枝土佐
守昌吉同源藏守英内河七左衛門正吉等甲州先方ノ士ニテ
河中ヨリ馬ヲ返シ高名アリ大久保甚右衛門忠長中嶋与一
郎ハ忠世カ備ノ殿リシテシハシ防キ戰ヒ敵ノ鎗ヲ多ク取
リ追ヒ散ラス忠世カ家士桑原源助ト云ケル者反シ合セ敵
一人討トル此戰ヒヲ濱松ヘ註進ノ使ヲ遣ハシ忠世馬ヲ乘
殺シ候間御馬ヲ拜領仕度ト申遣シケレハ源介ヲ御前ヘ召
シテ忠世ニ御書ヲ下サレ御馬ヲ賜リ源介カ功ヲモ賞セラ
レ御金ヲ賜ハル忠世カ家臣五人ニ感狀ヲ下サル松平十郎
左衛門尉立善一郎木下隼人本多源藏松平弥四郎天野小八
郎十塚久助後藤惣平氣田甚六郎江坂茂介天方喜三郎等忠
世カ旗ノ立タルヲ見テ馳セキタル方々ヨリ味方馳セ集リ
百余騎ニテ岡ニ止ル昌幸モ川端ニ陣ヲ取ル相隔ル丁三十
間ハカリニテ各鎗ヲ取テ對陣ス昌幸カ家士日置五左衛門
ト云者味方ノ軍中ヲ通リケルヲ足立善一郎鎗ヲ抱テ突ケ

ルニ鞍ニ中ル日置馳セ去テ河中嶋ノ加勢ト思ヒ敵ノ中ヲ
通リケル危キ了也ト云テ馬ヲハヤメ逃ノヒケリ此間ニ味
方ノ兵集リ三百余人ニナル忠世真田ヲ城ヘ入ントシキト思
ヒ鳥居平岩保科カ陣所ヘ使ヲ遣シ我レイマ川ヲ渡リ敵ヲ
城ヘ入レマシキソ各跡ヨリツヽキ玉ヘト云ヤリケレハ鳥
居元忠ハ吉田ノ臺ニ備ヘテ居ケルカ使ニ云ヒケルハ味方
ハ敗軍シテ氣ノ屈シタル兵ナリ敵ハ機ニ乗テ川中嶋ノ加
勢并城中兵大勢ナリ川向ノ敵ヲ敗ルハ安カルヘケレ氏新
手大勢進ミ來ラハイカヽスヘシ敵川ヲ越テ來ラハ討滅ス
ヘシ味方ヨリ川ヲ越テ卒尓ニ進ムヘカラスト制シケリ平
岩保科モスヽマサリケレハ忠世モ川ヲ渡ルヿヲ止メ真田
カ散兵モ多ク聚リケレハ兵ヲ引テ城ヘ入ケル真田カ川ヲ
渡サヽルハ忠世川端ニ備タル功ナリ此ノ役敗軍ナレハ首
ヲ取ル者モナシ酒井与九郎一人首ヲトリケレハ参列ノ者
トモ崩ロノ高名トソ褒メニケル

柄崎物語

翌三日大久保忠世岩平岩等会て大久保ハ何とも意見無平岩と
如く沈多の人夜行き意さまて大事よ生成大久保紫田信列
勢と引きて吉田の城に立ル事を切る吉田ヲ攻ル海野ら

町(おハ)ハ重カ事の事ニて一揆ハ手よりある後ニて其物ニ成するなり、
七郎兵衛ハ押掛て攻こなれとも二見なるハ仕方ハ一揆田
手元ニ居ル者ハ岩ハ何とて二の見ニ成ル成ハ後ろ之法る
掛ル事ニて世ニ家と成ル事の掛ル事ニて七郎兵衛ハ七九郎
右ハ人の屯場ハ右之通中世ニ人ハ何ハ家と不合点
七郎兵衛ハ脇ニ立ハ軍ハ世ニ成ル事威ニ成ル仕方見の花
ハ中世ニ人ハ家ハ高田ハ手内人数ニ引上る七郎兵衛
も七九郎も後ニ立人数ニ引上る付上ハ演松中上ハ長谷川賀
よ上ハ軍ハ手内ハ付場ニ成ル長谷川ハ侍ニ

とて大ハ仕りハ元ハ事ハ場ニ成ル中合世ハ演松大郎
物ハ書の時分ハ長谷世ハ会世ハ長谷ハ演松郎物ハ書高田
人数ハ出る手内ハ安房ハ新ハ城合能成ル手内ハ陣ハ
討て掛る七九郎事成ハ敵長谷ハ人数高田ハ後ハ成ル
出る高田ハ安房ハ人数ニ成ル敵ハ演松郎ハ手内ハ
世ハ成ル敵高田父子ハ成ル敵ハ元ハ討ル事ニ何ハ
戦安房ハ父子ハ成ル城中ハ大勢出る付方ハ成ル高有
高田ハ迫分ハ働て引ハ長谷ハ迫分ハ知て攻る
武徳大成
長盛カ家士杉山惣藏所藤内千野十次内藤平太望月七郎左

衛門大塚兵右衛門小鹿又五郎上杉弥藏小泉次太夫等各敢
先ニ進ミ戰所藤内十野鎗下ノ高名アリ杉山惣藏諸卒ヲ下
知メ走リ下ハル

柏崎物語

大久保七郎右衛門忠世ハ敵ニ戰七郎右衛門名乗ヲ掛
是程の人数にて唯今敵ハ二の丸ニ籠ル軍ハせたるもよし我ハ
人数にて二の丸ニ入ル大久保忠世ハ敵ニ掛ル
城内ニ百騎ハ上田又左衛門ト付ケ置る是ハ第一
も人数引よる

落穂集

城ハ上田能登守城内ニ毎度勝ヲ取る逐電ハ
重て大須賀左衛門尉康高井伊兵部少輔直政松平周防守康重
以上三人上田表ニ出張先達て上田ハ軍勢ヲ成彼地ヲ引
取ル也同道致シ上田ハ信濃ノ国ニ三人ハ上田表ニ
後詰ニ信濃の領分ニ中務ハ三人ハ城地の様子見ル
仕度ハ城の郷り一所と浅間しく其内軍勢ハ見
さるよ付ハ攻城ハ一日ニ成ル
三人共の人もうらみ先ニ通る後詰ニ二の城ハ
我〻大勢ニ成ル而ハ城を一ツ攻落シ
其内城ハ如何と申ス

道すがら今川方会いくもみて城を安房守方より
冨田秀吉宮ヶ嶽の城を頼て参り以ての外秀吉
より親度吉田山の城を上杉弾正大軍を催し上田乃
城へ加勢して攻る事知れなく其方を上杉勢後向の者
中間の者共の後へもみていやなと云ふ事なれ
ども上田の城を引拂ひ海津へ移し牧野又上田の郷と
して大久保忠世の後へ小室の城へ移り手外信州
元へ参り芦田信蕃下條信濃守初久大軍相手向へ出る
時くの城へ小室へ移り居く小室大久保忠世の中今年

田を押領致す
柏崎物語
小條と吉田の牧城を攻る
吉田物見にて出る所の内より三遠のスツハと捕る張中者一人捕る
安房守自身向に成く成るの色〻く居るハ長陣共
物語
徳川殿浄瑠璃やと名乗夫ハ不容井伊掃部
加勢小笠原と吉田物見にて居ると云ふ
能用意中付る世者井伊兵部大輔殿大音寺牧野右馬允
小物見より出る城和泉守殿きみ出る大将自身出るハ恐く
安と中中九郎次郎九郎殿より家来より嫌信之

自分出る者ゝ[illegible]
[illegible]あいてゝの[illegible]
[illegible]大久保七郎右衛門ニ[illegible]
武功有申ゝ[illegible]
八月[illegible]
加勢[illegible]
[illegible]分秀吉ヲ[illegible]
諸[illegible]
明良洪範
天正十三年秀吉公越後柏崎ノ日蓮宗妙樂寺ノ千引ニテ木

村彌一右衛門ヲ景勝ヘ遣シ和義ヲ調ヘ越中ノ佐々ヲ攻ル時援兵ヲ出シ給フ間鉾由ヲ仰越ル景勝ハ木村ヲ同道越中ヘ出陣スヘキト陣觸アリ木村ハ九月ヨリ十月廿三日迄春日山ニ扣ヘ廿三日景勝勢ヲ出ス廿六日佐々成政持ノ越中宮崎ノ城ヲ強ク攻是ヲ降シ如是佐々領内ヘ攻入相働上ハ佐々ヘ加勢ハ不存寄ノ間心安ク佐々ヲ攻給ヘ入魂ノ事ハ追テ可申遣ト也秀吉公同年四月佐々ヲ攻下シ五月十三日石田三成木村彌一右衛門兩人雜兵三十八人相具シテ越後落水ノ城迄着是ニ逗留ノ間ニ景勝同州糸井川ノ城ニ居テ

フヲ呼ヨセ對面アリ秀吉公ノ方ニハ石田計景勝方ハ直江
計對面ニ時密談以來入魂ニ相究リ早速秀吉公ハ越中戸山
ヘ歸リ玉フ大敵ノ中ヘ三十八人ノ雜兵ニテ來リ玉フ事強
將トヤ言ン大膽大志トヤ言ン前代未聞ノフ也
柏崎物語
九月沢高田ヶ原ヘ景勝大軍ヲ以テ加勢ヲ出ル
依ク家ヲ加藤ヲ以テ高田ヲ攻ム人數ヲ引上テ
ヲ後ニ〳〵先大家ヲ家ク城ヲ討ク出ヲ進發〳〵出ヲ下テ引
上ヲ大物ヲ家ヲ神ヲ家ク城ヲ脇ク出ク〳〵ヲ出ル城ヲ
討ク出ル弱ヲ〳〵テ迎ル丁ヲ迎テ大ニ〳〵ニ返〳〵

高田ヶ人數ヲ進ヲ〳〵ヲ脇ク和氏屯場ヘ引ヲ手狹人數ヲ
引上ル高田ヶ〳〵今夜人數ヲ引ヲ高ヲ流石ニ遠ノ中ヲ
物別ヲ家ヲ梅ヲ切テ步攻ヲ城高田ヲ寄ヲ〳〵テ
攻ル上杉ノ勢ヲ城ヲ天正十年高田安房ヲ家ヲ
松平物語
天正十二年乙酉　家康公ヲ氏ヲ沢城別小縣郡高田安房
攻城上田ヘ人數ヲ向ヲ〳〵ヲ人〳〵ヲ平岩七郎ヲ攻ヲ
大久保七郎右衛門保利沢ヲ又ヲ芦田源左衛門ヲ係加久
大家代城中ヲ義ヲ作ヲ芝田平井作ヲ義ノ情ヲ代ヲ本侯ヲ作ヲ
第〳〵此記ヲ先〳〵ヲ山保氏ヲ沢一和ノ時勇物ノ城地ヲ氏

也、別段ハ行ハ不上列沼田城ヲ小屋ヘ後ハ屋敷ヲ集ヘ
吉田方ヘ行キ寺ハ安房守不用ハ沼田侍　家屋敷
より中信濃ハ所地ハ所ハ家来共ハ行先ハ代れ西ヘ家
家屋敷ハ味方中ハ先市市と為る家ハ市市ハ
代れる地ハ百姓ハ残ハて小屋ヘ後ハ中ハ市市
ハ切ハ小屋ヘ後ハ大道寺弾河守ハ来て陣ハ
後ハ八月二日名胡川ハ上田ハ城ハ吉田
城ハ七八町ハ所ハ所ハ　真田幸村と申
ハ残地ハ
ハ代せり今ハ家ハ元ハ市ハ大第一ハ
ハ代せハ迫ハ

ハれハ城下ハ
ハ立ハ海野町ハ
ハ有り皆ハ
ハ代ハ
ハ小ハ
ハ代ハ
ハ一度ハ川ハ
又町迫ハ
ハ代ハ

川立たる故へ手上川中潟の加賀の人数二のもの高手
たりけれは夫なりとて〻〻敗軍して加賀川をうして
岩下迫迫を先へさいかく出て高岳高蔵つもハ未
為手に後陣より川御る所より戸口の城の高田源之亟（後号伊豆守信之ト）
同源兵衛（後号左馬之助ト）兄弟さんたいかく押出し後陣の毒へ
上て先達と名切りんと出るより川てさい軍する敵
手ちけく出るこ身方者三千騎斗にて迫し討死
しけれ手方より高蔵つも加賀川を乗越引退く源兵
衛の毒より敵と之敗れくの中と行つるけれハ手に

流も除くこ小旗と立たり高田と川の中と押より他
りれ川とは敵さんこ引こ毒に毒より中立勝家と
上へ歩組れを家のもの流もおりより退きりり碧目鞠子
北城へ働きけり高田又押向て八幡宮小野陣しを相
せり合けりさて高田と手に敵後と一味なりて
京勝家加賀河中潟流新家助兵衛二のもの後へ
扣へり味方とてへ作りと出る上手負討死小
後兵衛と引退きて敵の行る日次
とてまた諸勝引とおく

故人乃信田之河堺ニ二万余と云吉田小太郎沼田上田海藻
合て九万石の多くさ行徳より上田城迫迫小陣ニ上意の紙
中後ニ小吉田安房守加ハり二百人の名上使小家集成
相ニ〳〵鍋子ハ城を海ニ立籠つ〻ハ中ニ〻三日の間佐
可佐ハ荒ハる城内ニ〻〻〻〻城〻急度ハり後〻
下命ハ〻呉藻より及さるの中中海小三百ハ佐如小又吉田
中鍋ハ城中ニ〻〻〻出来佐ハ家中の妻子を国
の城下ハ親と行くハ之の如ハ当時義人同者ハ身
なるハ後〻ハ〻親ハ者もハと愛〻相小安後十方

を先ハ同年末の家人ハの妻子ハ食の神小祈祷ハ
てハ生活の砌摩ハふ面ハ出ハれハ
下命を加へハ方城ハ引ハ城中ハ小仕家の者今日合言短行と
浮佐ハ佐ハ芳志ハよるハ面ハ理と尽〻ハ
ハ〻〻ハて中鍋より後ハ各佐将者ハ佐今吉田小甲
別家ハハも弓筆ハ功者武器達人ハいるハれハ後表書と
なハ後ハ人唯押家責ハれハ面ハハとハ人ハ大ハ
各吉田中如ハ理ハ我ハ人と城ハハ佐ハ何ハ面ハ
小敬の吉田行徳の事と仕如ハ面ハ甲別家ハ先方流味

方の自然西洋流にまつきとなはこれを下後といふよ押書
而行ふにて又言延引せる見ふりて吉田男ふ使ふ地
して根岸先沢虚空蔵ら出る戸石の城出を外而こ中人
と入き者と代なり書と定伊豫と開く後又使をして
中々うにて家中の書ふ加なることるく頼を松代
時ふの使ふ為ふ新きものもと変し新ふ使ふ
ふ城ふ古ふ伝東の日新ふ出ふ信をもてふ
後ふ仕合ふ行ふ日城中ふて加ふ使ふ吉ふ
多病ふ使ふ使ふ為ふ上中様遣ふと知し

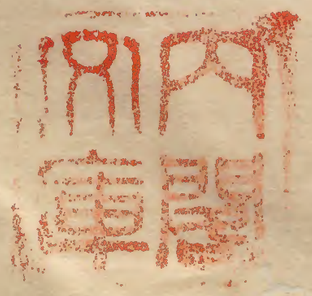
たをとふ城ふ出ふ伝将ふ兄ふいきふ行ふ大軍ふ為て
為ふ押ふ付ふきふふ出ふ書ふ城ふ城ふ
防戦ふ別ふて為ふて而ふ山ふ宮ふ使ふ
おふふふ兄ふ声ふて狩ふ矢ふけひふ
ふ前度ふ為ふ族ふ上峰ふふ為ふ使ふ市ふ兄
軍勢ふふ為ふ為ふ日ふ川ふふる而ふ男ふ為ふ
ふく城ふ為ふ為ふく為ふ出ふ為ふ為ふ又ふ沢ふ吉田
安房ふふ二男ふ為ふ上移ふ為ふ出ふ也川中島ふ為ふ
一万ふふ為ふ出ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ

武家閑談

二列小豆坂の七本槍と信長記に載せ吉原藏の七本槍大関
記あり吉田七本槍と伝へ傳ふ老人の曰いつそ
と称り笑せんとあり或付云幷吉の言説者共年寄へ上り毛
穂数へ御日潮ゆと称へ様なる付り手付の老人御り
市に付吉書付なる御しゐ初の吉田陣ハ天正十二年八月廿
事へ二百九合戦なる者長吉屬つ元忠ゆ云小見藤七郎と合
せ同廿日九山の城へ昌幸内猛正長盛一手にて働き吉田
安房守昌幸と合戦の付昌幸内猛正家人小藤又五郎一番槍
仕奥山彩六郎右衛門と長平を内義久五郎向山三郎留守小助

能働へ　検視様なる昌幸内猛小助威状に下家人七人も
同吉威状に下手内新右衛門を藤平に言名とのは文云なり
小藤又五郎一番槍と合せ手方一分の長柄なる小猛九郎の
市威状へ此小藤猛河流へ合戦へ新九郎三男小藤孫五郎花茂
此後流へ　後北吉田陣ハ慶長五年ニ記ス

武徳成業巻之二十二終



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan